

2019年度 こどもの木かけ・野のはな空のとり保育園 自己評価・学校関係者評価

◀ こどもの木かけ・野のはな空のとり保育園の自己評価 ▶

1. 基本理念・保育方針

<p>■こどもの木かけ 2002 基本理念</p> <p>『汝らは、地の塩、世の光である』 (マタイによる福音書5章第13節—14節)</p> <p>キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。こどもの木かけ(玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園)では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。</p>	<p>■ 野のはな空のとり保育園 保育方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の子どものリズムに配慮し、動的な生活空間・静的な生活空間を考えた保育環境を提供し、能動的な活動を育てていきます。 ・人の成長・発達の基礎ともなる、さまざまな場面や状況を受けとめたり人からの働きかけを受け入れたりする『うけいれる力』を育てます。 ・自発的に試行しながら自らの取り組みを確かめられる『とりくむ力』を育てます。 ・「もの」「ひと」「じぶん」の相互の関係を意識して生活世界に働きかけられるように『むかう力』を高めています。
--	--

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

<p>①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とのかかわりをととした生きる喜びや自己表現が達成」できるように ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように ③あそびをととして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように</p>

すべては環境から

<p>子どもが主体的・自発的にあそび、学ぶために不可欠な環境構成は、心地よく過ごし、生活し、あそび「空間(場所)」環境と、充分にあそび、休息する充実した「時間」の環境、質と量が配慮された遊具や本物・良質な家具や調度品といった「もの(道具)」の環境が基本的条件であり、これらをうまく組み合わせるが保育者の役割です。同時に子どもとの豊かで温かなかかわりも重要なことです。保育者がこうしたかかわりを高めるための人的な環境の一部でもあるのです。</p>
--

2. 活動状況と自己評価

【基本的事項】(こどもの木かけ共通)

<p>◆子どもたちが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とのかかわりを高め、育ちあえているか</p> <p>そばに居るおとなが手を出さず、子どもの取りくみの姿を見守る姿勢は、信頼関係や愛着関係を築き、子どもにとって安心できる存在となることで培われていく。誰もが出来ることではないことを当たり前のように出来ている園の風土があり、子どもたちの「向かう力」「取りくむ力」「うけいれる力」が形づくられている、と再認識した。</p>
--

<p>◆子どもたちに豊かな感性が育つようとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか</p> <p>今年度初めてわらべうたプロジェクトを立ち上げ、職員がたくさんのわらべうたを覚えて子どもたちと楽しんだ。今までになくおとなや子どもの歌声があふれる明るい雰囲気となった。またその中でも1対1での手あそびうたを通し、スキンシップから深まる愛着関係やベースにして、自発的にひとやもの、環境にかかわってあそびを膨らませていく力が備わっていった。</p>
--

【重点的にとりくむ課題】

<p>◆こどもの木かけの基本理念・保育方針に基づく保育の実践力を高める</p> <p>木かけの基本理念・保育方針の中には、新しい保育指針でめざすものが内包され、同時にそこから更に木かけならではの独自性をふくらませてあるということを経験を通して学びあった。保育を実践するにあたっては、職員一人ひとりが自分の思いを保育理念の中に重ねていき、成長していけるような学びを続けていく、と確認した。</p>
--

<p>◆保育の連続性を意識してPDCAサイクルを実践する</p> <p>子どもの姿をととして計画がつくられ、子どもの姿をととした振りかえりの着眼点を持つ。発達の道筋を理解した上で、現実の子どもの姿を確実にとらえることを大切にしながらPDCAをすすめてきた。保育の連続性は目標課題の設定と達成ではなく、このように常に子どもの姿に立ち返ることだということ意識してきた。</p>

<p>◆アルウィン学園全体を理解してもらえるような子育て支援・地域支援のとりくみをすすめる</p> <p>今年度から園だよりに新しいコラムを掲載し、幼稚園とのかかわり、専門学校との交流、地域の方々とのつながりをテーマに発信した。園だよりは利用者のみに発行するものなので、このコラムをホームページにも掲載するとよかった。また保育園見学の方は近隣にお住まいだが学園には今までゆかりのない方が増えている現状がある。こうした方には、保育園のことだけでなく幼稚園や学校とのつながりについてもお伝えし、学園の存在の周知につなげた。保育園職員がかかわる親子ひろばの栄養相談、健康相談も好評で、リピーターの方も多く、保育園・幼稚園の入園につながっている。</p>
--

3. 今後の課題・取り組んでいきたいこと

- 1 今年度の卒園児は全員が幼稚園に入園することとなった。保育園が大切にしている保育実践を幼稚園でも継承され、働きながらも安心して預けられる実感を持っていただけるような幼保連携の取りくみを継続したい。
- 2 わらべうたなどのプロジェクト活動は保育実践に即活かすことのできる学びとなった。プロジェクトで身に付いた実技や実践は、学園が創立以来大切にしてきたことや、保育理念・保育方針の根拠となる根本的な考えを理解した上で行われてこそ、それが真に子どもにとって生きたものになる。今後このような本質的な学びを続けていきたい。
- 3 今年度は保育士倫理綱領や保育指針などの学びをしたが、今後も職員・保護者双方の協力のもと、健全で円滑な情報管理・秘密保持・個人情報保護や人権擁護に努めたい。さらに、SNSの利用に関するリテラシーの基本を学ぶ機会をつくっていきたい。

◀ 運営委員会による学校関係者評価 ▶

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

「すべては環境から」に自己評価しているように、環境をつくることに非常に重きを置いている。「空間(場所)」「時間」「もの(道具)」のそれぞれの側面において、当年度も取り組みを継続している。詳細な自己評価チェックシートにおいても、環境づくりへの真摯な取り組みと連続性を意識している姿勢が現れていた。

「もの(道具)」の観点では、設備の更新や家具や調度品の交換、遊具の入替えなどがあるが、単に新しいものを入れるということではなく、何をどのように配置すれば子どもにとって快適で安全な「空間」や「時間」をつくることができるのか、子どもの成長や個性を引き出すためにどのような道具が最適か、ということを考え、実践している。その選択の素晴らしさは、日ごろのケースカンファレンスや保育者とおしの連携によって達成されているということは、実際に保育室で遊ぶ子どもたちを見ていただければ、納得がいくのではないかと思う。

昨年度は、保育所保育方針の見直しをうけて、園の方針の再確認をして、保育者で共有したが、今年度はそれにのっとった保育を実践するとともに、保育者の成長にも力を入れた。内部研修の充実、PDCAサイクルの継続であるが、その成果は子どもの姿に立ち返って確認をしている。

2 今後とりくむ課題

今後の取りくみとして、玉成幼稚園との連携、理念に基づいた保育の実践、情報社会への対応を上げている。子どもに対する必要な支援は変わらないが、環境変化にも柔軟に取り組んでいく方針である。また、アルウィン学園全体の考え方を理解していただき、子ども支援・地域支援にも継続的に取り組む方針である。

3 総合所見

自己評価にある「わらべうたプロジェクト」について質問してみた。「たいしたことではないのですが」と言いながら「すいすいすっころばし」「にらめっこ」のように昔から歌い継がれていた童謡を歌いながらスキンシップを楽しむことで、保育室が笑い声に包まれ、子どもたちの愛着関係を深めることができたと説明してくださった。子どもにとって必要なものは、決して高価で新品な道具ではなく、心地よい環境であるという考え方に、深い愛情を感じることもできた。0歳から2歳までの大事な育ちを助け、個性を引き出し、安心して過ごせる環境を、今後も提供していただきたい。